

昭和55年五月十一日 第三種郵便物認可
平成24年6月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第66巻第6号

沖

俳句雑誌[おき]

6
月号

沖
発行所

路地住まひ

能村 研三

長寿俳句

岡崎研修会

再会 は 夢 中 落 花 に 句 碑 闌 け て

駘 蕩 の 足 投 げ 羅 漢 句 碑 を 守 る

味噌樽 の 箍 締 め 著 き 春 深 む

みどりごに意志湧きいづる初端午

「俳壇」六月号では、「いよよ華 やぐ・八十歳からの俳句人生」と題して特集を行っている。八十歳から百歳までの俳人百人のアンケートが載っているが、「沖」からも酒本八重さんと長谷川はるさんが参加してくれた。そして巻頭言として正に俳壇の最長老の林翔先生が「傘寿・卒寿」と題して文章をお書きになっている。長寿の秘訣は「くよくよせず大らか」と言うことで、俳句を詠むことも人生の大きな励みとなっているようだ。「沖」にも八十歳を越えられた方は幾人もおられ、句会やカルチャー教室にも熱心な参加者のいることは大変うれしいことである。林翔先生も、九十五歳になられたが、毎月の「沖」には作品と随想をお寄せいただき会員とともに楽しませていただいている。

みどりごが真中端午の小酒盛

花棟荷風と同じ路地住まひ

朴の木に登四郎湘子の花探す

離陸機は夏日にまみれ海上へ

開発は頓挫してをり夏つばめ

わが町の文豪画伯緑さす

句会の指導の方は先生からの申し出もあり、お休みをしたい旨の電話があったので、早速自宅に伺い先生とお会いすることができた。呼び鈴を押すと先生の元気なお声があり、ゆつくりと二階から階段を降りて来られ、お話をさせていただいた。

先生からも「句会の指導の方は、無理がきかなくなつたので遠慮したい、しかし毎月の「沖」には作品と随想は出したい」というお話をいただいた。

俳壇の最長老がわが「沖」にもらえることを誇りとして、私たちも頑張りたいものである。

能村 研三



蒼茫集



舵輪

荒井千佐代

欣求浄土

北川英子

春寒や午後の潮鳴り厨まで
廃船の木目浮き立つ涅槃西風
祝婚歌弾くや春愁真つ只中
春満月懺悔室にも小さき窓
島行きの太き舵輪や復活祭
蝶生れて欠勤届けの理由は家事

朝靄の森のひそひそ抱卵期
湖なりに道なりにどこまでも桜
一糸より揺れの広ぐる糸桜
夜桜のかぶくもしだけ桜かな
行く春の穴太積てふ味噌重石
欣求浄土師碑とかく浴ぶ落花こそ

竹 籬 千 田 敬

球 春 大畑善昭

春夕焼染む帆柱も一行詩
春の川山に別れのちから抜く
師を憶ひ長嘯せむや朧夜は
花吹雪抜けて男ごころ削がれけり
竹籬の鬻びかりも夏隣
「もういいかい」大樹のさくら散りに散る

蒲公英や男の子に小さき翼生え
球春といふ語が記事に躍りゐる
サンデイエゴより厚き文暖かし
春日の木の切口に塗りぐすり
一鍬を入れる耕し稿もまた
老人が来る初蝶にみちびかれ

胸ポケット

吉田 政江

体内にひかりの時計春障子
米二合足して研ぎおく入り彼岸
彼岸西風豆腐屋の笛切れぎれに
花冷や胸ポケットの特急券
よなぐもり新車といふはいつまでを
花吹雪ブレーキ踏んでしまひけり

楚々と

千田 百里

何となく楚々とホワイトバレнтаイン
失踪の木馬の脚か春北斗
鏡よ鏡わたしは幾つ亀鳴けり
謹慎を解かるるこち春障子
海化して陸の億年おぼる湧く
松の芯（岡崎城）こぞる江戸史の起点かな

春の日傘

辻 直美

恋の句の見事な春の日傘なり
源氏絵巻御法の卯の花腐しかな

花はみな月の火種を秘めにけり
花びらのごと幼子は風に乗る
段つ家の花冷え地袋天ぶくろ
はつ夏の注連縄を張る地鎮祭

萌芽

辻美奈子

春月へ父の梯子をにかけてみむ
子の髪に茅花つめたくそよぐかな
萌芽また翁めきしよ翁草
くれなゐの唐子椿の落ちしぶる
春あけぼの有袋類の赤ん坊
コンピュータ狂ふは怖し桜の夜

もう一度

望月 晴美

野菜顔して咲く畑のスイートピー
咲く前のさくらの樹液あからむ
寿ほきの色世にあらばあれ朝桜
ひとすぢの柳絮の流れ光なす
もう一度同人誌『絵巻御法』師碑を拝すや飛花尽きず
春深し等身大の位牌の座

暁光 遠藤真砂明

暁光の息吹新たに松の芯
大手門より朝駆けのつばくらめ
五万石晴れの碑桜吹雪かな
歳月の果ての胞衣塚鳥帰る
真つ当に生きて畦塗る老い力
いのち燦々競漕のゴール前

合格す 松本圭司

ドレッシング振るや一気に春の彩
高々とこぶし突き上げ合格す
悠久の時がしだれてゐる桜
芍薬の赤芽ほどなる祝ひごと
朧湧き海は太古の景となる
家の灯の見えて俄かの花疲れ

花の山 田所節子

禽たちにふところ深き桜かな
走り根を黒く浮かせて花の山

みどりごの乳吸ふ力芽あぢさゐ
鉢の土替へかげろふの中へ置く
しりとりをしつつ土筆の袴取る
清明や朝日に潮目輝いて

母校の名 久染康子

摘草の遊びの嵩を越えてをり
裏山のどの巣箱にも母校の名
山彦を丸呑みにして雪解川
疎と密の糾ふ谷の花吹雪
檉並木の芽吹きしぶきを浴びにけり
百年の床の踏み艶新樹光

雑司が谷旧宮教諭館

桜前線 森岡正作

悪友が逝く裏山を笑はせて
着任す桜前線掻い潜り
直に生き英傑の地の青き踏む
花冷ゆる喜怒哀楽の哀深め
春空に何描きても薄れけり
田水引く先頭の水嬉しさう

おくりびと

秋葉雅治

沖鳴りに耳立て東風の岬馬
一網に万華鏡なす螢烏賊
みちのくは花もかぶくか啄木忌
河より川分かれ下総さくら東風
ふぶく花の行方見守るおくりびと
浜離宮過ぎて転舵の花見船

みどりの夜

柴崎英子

野火放つ男寂しさ募らせて
怨念の声あぐ野火の焰かな
芽起しの雨やとろりと豆煮えて
花吹雪浴び来し夜の微熱とも
甲冑になほ反骨の余寒かな
丁寧にな文書く事もみどりの夜

春日傘

高橋あさの

校歌の碑残し閉校木々芽吹く
騒めきて修羅めく夜のさくらかな

おぼろ夜の厨に残る酢の匂
機嫌よき一日をたたむ春日傘
日の入りの水の蒼さよ残る鴨
裸電球灯る味噌蔵涼しかり

流速

渡辺昭

木の芽張る疎林明るき日に風に
推敲の朱筆を加へ夕牡丹
軽鳴の嘴よりこぼれ白きもの
流速に添ひゆく歩み春の虹
輪塔の影蹲り忘れ霜

山彦

鈴木良戈

山彦の大きな返事木々芽ぐむ
桃の花帰巢本能疼くなり
囀や黄色の多き玩具箱
空襲を逃れて今日の花の下
今年また母校の門の桜かな

潮鳴集



オムライス

藤井みち子

匙ふかく海市たつ日のオムライス
駘蕩と白湯のかをれり文出さな
囀や荷風の墓のまつとうさ
飛花落花墓の地番のつと消ゆる
春闌けてめぐるや縁なき墓域

春の雪

堀口希望

無言館出て無言なり春の雪
けふよりは汝が山河なり初つばめ
一列に艇還りくる霞かな
ころざしなきにもあらず青き踏む
砂時計に砂の音なく春暮るる

決壊

小嶋洋子

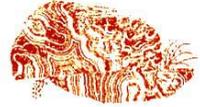
かぎろへる讚美歌集の走り書き
門衛の配るマップようらけし
神楽坂はんなり車曲がり春
白木蓮そこだけ瑞々しき空気
中空の決壊さくらさくら散る

一山

掛井広通

佐保姫の決めし一山より芽吹く
鍵穴の深部の鼓動春の闇
珈排の渦に音ある朧かな
逆光の海に一塊花吹雪

沖作品



能村研三選

三鬼忌の握り湿りの磁気切符

薬の蝶 F 値 4・5 にズーム

シティー派といふも泥好きつぼくらめ

籠鳥の晴のももいる仏生会

鳥の恋もうつかはないガラスペン

春満月心にもある吃水線

書き出しの一字滲めり鳥帰る

初蝶のまはりの光あつめたる

袋掛け了へ枇杷山の飛び立ちさう

花どきの空にさざめく雲の綾

バスタブの落ち水やはらかに四月

古傷のちりりと攣れし春時雨

投了の棋士の指先花の色

蛤の舌に触れやる夜更けかな

新生児室に春来る母ら来る

千葉

井原 美鳥

長崎

柿本 麗子

神奈川

石田 静

鱒東風佃は江戸の復元図

生真面目な折り目の残り紙雛

春光をくるくるぼんと象の鼻

蛸壺に菜の花活けて島の宿

桜湯やゆるゆる緩む脳の襞

春愁をいのちの艶と思ひけり

めでたしで終る民話や春の雷

継ぐ継がぬ子の言揺れて花りんご

湧く雲は空のアドリブ花辛夷

園児載せ花の中より箱車

途中にて戻りし春の雪女

雪囲ひ解き裏庭へ風通す

雛納めさらりと使ふ羽根叩

うららかや研師荷台で店びらき

二つまで用足しあとの臍かな

東京

七種 年男

岩手

藤原はる美

岩手

佐々木みき子

沖作品 15句選評

*
能村研三

薬の蝶 F 値 4・5 にズーム

井原 美鳥

一見した限り、俳句らしくない俳句である。カメラの宣伝広告の一フレーズにも思えてくる。しかし一句の中には、しっかりと伝えたいことがこめられていて、大写しに撮られた一枚の写真が浮かんでくる。写真技術のことは詳しくはわからないが高倍率のズームレンズを使うと、花の薬で蜜を吸う蝶の生姿も観察できる。望遠レンズを使えば、蝶にそっと近づく必要もなく、二メートルぐらい離れたところからも撮れる。カメラのF値というのはレンズの明るさと、絞りの大きさを表わす数値で、ズームを使う時は、その値が4・5となるらしい。

袋掛け了へ枇杷山の飛び立ちさう

柿本 麗子

長崎県の茂木は千葉県の館山と同じようにびわが生産されるところである。枇杷の実一つ一つを丁寧に袋掛けし、木にそのまま、熟成させる。また、この袋掛けにより、害虫から保護で

きるの、露地栽培でも綺麗な実が出来上がる。二月から四月頃にかけて袋掛けを行うそうだが、この頃のびわ園は一面白い花が咲いたようになり早春の風物詩でもある。作者はびわ園を遠くから眺めたのであろうか。一つ一つの実にかけられた白い袋を見ていると枇杷山全体が飛び立っていくようにも見えたのである。

バスタブの落ち水やはらかに四月

石田 静

使い終った風呂の水も、一つの詩として俳句の素材になりうるものなのだと思う。日本では風呂は、空間的にはハレの場として位置づけられていて、「きれいになるため」の生活習慣として大正時代ころから家庭に普及したという。花疲れでもあったのだろうか。体をじっとり温めてくれた風呂の水が排水溝に落ちてゆくさまを「やはらか」と表現したのは面白い。

鯨東 風佃は江戸の復元図

七種 年男

東京銀座から間もないところに佃島がある。現在はウオーターフロントとして大きなマンションが立ち並ぶ近代的な街に変わりつつあるが、江戸時代徳川家康の命により埋め立てられた島で、摂津の国の佃村が呼ばれた漁師たちがはじめた佃煮が有名になった。「江戸」のなごりがまだ残っていることで、「もんじゃ焼き」など庶民文化が定着したまちでもある。

(以下略)